（２）伊藤　泰郎氏の思い出

①稲田　昌義

卒業後の出会い２件

（１）東京へ出張し、晴海の国際見本市会場でのイベントショー場内を見て歩いていた時、「おい稲田、今夜は空いているか？」と声を掛けてきたのが、伊藤泰郎君であった。「田崎さんが東京へ出張して来たので、今夜同級会を開く、幹事は北野君で会場は銀座」とのこと。即、OK をして別れた。

＜伊藤氏　左端＞

その夜は銀座でのミニ同窓会に参加することが出来た。

（２）伊藤君が病気をして大手術を受け、身体を動かすことが出来るようになってから同窓会を計画して、飯田線の湯谷駅近くの温泉で開いてくれた。頭には毛糸で編んだ帽子をかぶっていた。二日目の散会の際、電車の駅で別れる時の彼の挨拶は、「死ぬなよ。」であった。それから、会うことが出来なくなってしまった。

②小川　順宏

“好きな人の一人でしたが、そこで名前の泰郎（たいろう）を戴いて次男の名にしました。その後、彼に会うこともかなわず、そのままになってしまいました。”

③津田　眞臣

彼は人を纏めるのに異常な才能を発揮することがありました。

これは彼の生前数ヶ月の話で、今でもよく覚えておりますが、関東地方の同窓会を有志数人で行った時、彼曰く「たまにしか会えないのに、この一次会だけで解散するのは忍びない。本音の話合いも含めてもう一軒行こうではないか」。

これには参加者全員が即座に賛成し、大いに盛り上がったことがありました。

お葬式には、参列させて頂きましたが、あの幸せそうなお顔は忘れることが出来ません。　伊藤君どうか安らかにお休み下さい。　　合掌

（３）伊藤　芳朗氏の思い出

①久保田　康平

伊藤芳朗氏とは、以下のような縁がありました。

第二次大戦中に大阪市内にあった私の住居が焼かれて、戦後も住居を転々としていた頃小学２年生から４年生の間　吹田第二小学校で過しましたが、その時「伊藤芳郎君」が同じ組で家も近く友人でした。私はその後信州に移り住み、一年浪人して大阪府立大学の電気工学科に入学した時に「伊藤芳朗氏」と再会し、奇遇に驚きました。その後も友人としてお付き合いさせて頂きました。

②北野　雄一

私が卒業後に勤務していたのは殆どが東京で、大阪に転勤で勤務していたのは昭和 38 年～42 年の 4 ヵ年だけでした。大阪不在の頃のことと思われますが、伊藤　芳朗さんが旅立たれたことを知りました。いつの時点であったのか、何が原因で亡くなられたのかは詳しくは知りません。

伊藤さんと知り合ったのは、入学後すぐの頃、キャンパス内で各部活の新入生獲得の催しがあり、バドミントン部のコーナーで伊藤さんが入部を誘惑されていたのです。そこに通りかかった私も同じ電気工学科だと言うことで、一緒に入部しないかと誘われ、余りスポーツ関係は得意ではなかったのですが、心機一転やってみるかと二人で入部手続きをいたしました。その年の新人は結局この二人だけでしたが、それだけに時間の許す限り日々の練習と、夏季合宿にも参加していました。放課後、もう暗くなった夕方に練習のために二人揃って府立体育館に通ったときを昨日のように思い出します。私は私的な都合もあり、1 年ほどで退部しましたが彼はその後も続けていたようでした。

また、新岡さんをお師匠さんにして屋内スケートリンクで始めてアイススケートに挑戦したのもこの頃のことでした。その年の冬、手摺りの無いスケートリンクで練習の成果を試すべく 3 人で信州蓼の海に遠征し、一日中スケートを楽しんでいたのも想い出のひとつです。時間の制約が無いのを幸いにして、信州の帰り道、遠回りをして伊豆半島にまで足を伸ばしてスケート疲れを癒したこともありました。

右の写真は、入学後暫くして和歌山組の石井さんと出水さんに案内していただいた和歌の浦での一コマです。

いま、改めて卒業時のアンケートを覗いてみると、クラブ活動の A 級突入と海外旅行が望みだったと記されていますが、後者はともかくとして、クラブ活動の A 級入りは彼の努力にも拘らず果されなかったのです。

彼は温和で真面目な人間であったのは良くご承知だと思います。クラブ活動をしていたときは、彼の自宅にも何回かお邪魔し、またご両親にもお会いいたしました。最愛の息子が若くして旅立たれたご両親の想いはいかがだったでしょうか。死亡率 100%の我々もいつかは同じ道を歩むことになるのでしょうが、志半ばで先立たれた悔しさにはなんとも言いようの無い虚しさをっ感じます。在原業平が詠んだ「終に行く道とはかねて聞きしかど　昨日今日とは　思はざりしを」という和歌がありますが、年齢を重ねてきた今日この頃、この和歌が心から離れなくなりました。。

伊藤　芳朗さんのご冥福をお祈りすると共に、我々がいつかそちらに行ったときは、昔の好で出迎えてくれることと思っています。　　終